ころなら港のあるところだ、すぐに日本に帰ることができる」と話し合い、よろこびの気持ちで、一泊二日野営をしながら鉄道ぞいの国道を行軍。牡丹江を発した汽車が来たが、来る汽車も、来る汽車も家具、機械類を満載してあるので、一向に乗れそうにもない。

三日間行軍で、ソ連領に入ったら、ソ連のトラックにぶんじょうされ、名も知れない山中に送られ、ただちに伐採作業に狩り出された。ノルマつき強制労働の第一歩である。その後、作業部隊がいくどとなく編成され、鶴岡隊もぶんだん四散となっていった。

昭和も二十二年となった。将校は全員指揮権をはくだつされ、モスクワで共産主義教育を受けてきた者が作業隊指揮者となり、生死限界地獄図の強制労働が続き、私も仲間を助けようとして、見つけられて、一週間の責め苦を重営倉のなかですごした。とにかく日本に帰りつくまでは死んでたまるか、としてなんとか頑張りとおし、ダモイをゆるされたのは二十三年十一月、ナホトカから舞鶴港についたのは十二月一日であった。

故郷・新潟県新発田市に帰ってみたら、鶴岡炭鉱で別れた妻子五人の遺髪が実家に届けられていた。妻子五人は、私と別れた後、会社の人達と共同生活をしていたが、寒さと飢え、非衛生の生活のため、昭和二十年中に子供四人は死亡、妻は二十一年八月、帰国することになり、社員達と共にナホトカ港に行ったが、検査で伝染病診断で新京に送還され、新京伝染病院で死亡したことが、新発田市出身の病院職員の説明が、持参の遺髪とともに実家人になされていたのである。

ああ！無情と天をあおぐ私であった。

ダワイ・ヴイストレー

新潟県　片山正治

千島ウルップ島から「日本に帰す」と言われてついた港がソ連領ポートワニ港の収容所だった。

マンドリン自動小銃にかこまれ、鉄条網にかこまれた堀立小屋、コーリャン、馬糧、脱穀しない米、大豆かすの食糧。この食事の粗末さのつぎの大敵は寒さであっ

た。零下四、五十度、ストーヴ一個、支給された毛布一枚と防寒外套でゴロ寝の毎日である。零下三十余度のなか、豊かな食糧ではないが、苦しくはなかった千島の生活をへてきた我々にも、この環境はほねみにこたえた。

身体から目にみえて力がなくなっていった。「ダワイ・ヴイストレー！」銃にこづかれて息もこおりつく戸外にかりだされ、明けがたのこおりついた道を作業に急がされる。鉄道敷設工事である。満足に道具もない。鉄の棒とスコップ、ハンマーぐらいしかないなかで、軌道床づくり。極寒にこおりついた土砂れき扱いは容易ではない。

生死限界の粗末な食事と極寒零下四十度の寒さ、シラミの大群がはなれない衣服、「ダワイ」「ヴイストレー」と自動小銃で囲まれての強制作業の毎日。そのかれつさ、非人道的な取り扱いに、栄養失調や作業怪我がもとで、日に日に犠牲者がふえていった。

作業人員が減っても、収容者の作業量はへらされない。絶食をかけての人間らしい取り扱い闘争もくわだてられたが、「いかなる理由があっても、ソ連政府の命令に反抗する者は、ただちに地球上よりまっさつする」というのがソ連側の回答であり、「ダワイ」「ヴイストレー」は一層のかれつさをくわえるのだった。

生きるためには、仕事へのかげんが必要である。ノルマは落ち込む一方である。ソ連側がどう考えたのか、作業が水道関係になった。管理のための作業になっても、その環境の変化はない。夢遊病者のように、小さな石にもつまずいて倒れる者が多くなる。このままシベリアの凍土にくちはてるのではないかという恐怖と不安のなかで「ダワイ」「ヴイストレー」を聞きながら、力なくスコップを動かす。

作業ノルマが思うように上がらない、不良作業者のレッテルをはられ、一週間くらい貨車に乗せられて、一層かれつな重労働にかりだされた。カーメンラボーターである。岩壁をよじのぼっての岩れき運搬作業である。一体なんのためにこんな目に遭わされるのか、ひしゃく一杯のスープとカーシャ（粥）が食事のなか、強制労働に言葉も出す力がなくなっていった。

とにかく生きるんだ、こんなシベリアの凍土に埋めら

れてたまるもんか。なんでも食べよ、家族の顔をみるまでは、なんとしてでも頑張り抜け！　身体が、心が叫ぶ。食うことが第一、餓鬼道とはこうしたことをいうのだろうか。

ただいちずに生き抜く執念が通じたのかどうかは解らなかったが、食糧配給が徐々に良くなり、黒パン三百五十グラム、スープ、少しではあるが砂糖も支給されるようになった。作業も余りにも「ダワイ」「ヴイストレー」と言われたときは「スターリンピシピシ」と手紙を書くまねをすると、変わったようにおとなしくなることも覚えてきた。スターリン独裁政治、直轄部局政治局員、これが一番こわい。ソ連人の目がそう語っているのがよくわかるようになってきた。

極寒と栄養失調でふとももとお尻の肉がなくなり、腕をふくめて骨と皮の状態のなか、「ダワイ」「ヴイストレー」の声と、自動小銃にこづかれながらの強制労働の日々。祖国、家族の顔を思いながら、異境凍土に無念の死をとげていった数多くの戦友達のためにも、なんとしてでも生き抜かねばと、強制労働にたえぬく自分であった。

シベリアでの電気屋さん

新潟県　金田市郎

二十年十一月揮春経由クラシキノ収容所をへて、ハバロフスク第十七収容所におちつく。収容所での労働はおもに伐採及び木材の集積作業で、木に関係したものであった。

山から帰り、皆と一緒に馬糧コウリャンの浮いている重湯をすすっていると、T軍曹がきて、金田、御苦労だが、衛兵所までいってくれとのこと。何の用かと聞いても軍曹にも良くわからない。ただ、電気のわかる兵隊をということらしい。

衛兵所へいくと、俺の顔を見て兵隊が何かわからないが、ペラペラ言っている。俺にはチンプンカンプンだ……。おくれて通訳がきて、話がわかった。軍医の部屋の電灯がつかないので、修理しろとのこと。そんなこ